

# 清流（楽曲『dear』、イラスト『私のせいで君は死ぬ 私の生に君は先立つ』翻案）

×××とは知り合ってもう20年近くになる。

×××は小、中学校の同級生で、そのうち何度もクラスメイトだった。

チヨークと黒板が奏でるリズム、その隙間から唱えられる先生の念仏。選択肢や結末の少ないアクティブラーニングとかいうRPG。感情に任せて吐かれる誰も幸せにならない叱責。そんな整えられたコンテンツを自分たちは同じ時、同じ空間で体験していた。

その頃、×××と何か特別めいた間柄はなかつたと思う。特に自分と彼女の尺度では。でも、最近になって卒業アルバムを見返してみると、寄せ書き欄の一ページ目、その左上には丸っこい文字のメッセージが×××の名前とともに書かれていた。

高校に進み、彼女は「SNSの中でたまに様子をみかける他校の人」になった。他の友人、その友人なんかの投稿に混ざつて彼女のそれが流れてきたようだが、当時よっぽどそれが彼女のものだと気にして見たことはなかつた。誰が何をしているかなんて気にしているほど暇はなかつた。

やがて、自分はおそらく唯一の選択肢だった、「地元で働いて生活を営む」という選択をした。ところが、地方都市に生まれ一人前の年齢になつても地元に残る、という人間はそう多くないらしい。20代になれば大抵、それまでの住処よりも少し規模が大きく、少し距離の離れたような、そんな「街」での生活に憧れ、そこに働き口を求めるものらしい。そんな欲がどうやら同世代にとつて適当らしいことを、自分は周りを見て知ることになった。

自分たちはなぜか、気づいたときにはある石の上にいた。この石は、渓流の中にある浮島としてのそれで、どこからともなく古めかしさなどにとない頼りがいのなさを漂わせている。ここから周りを見渡してみると、少し離れた上流の方に、その頭をより突き出して、しつかり丈夫そうにしている大きな石がとりあえず確認できる。初めのうちは、みんなでそうやって石の上から周りを観察していたが、やがて、自分たちを包み込んでいる渓流が、不思議で残念ながら、緩やかに、しかし体感を持って、その水流を強めていることを知る。もし、この石の上にずっといれば、いつか、この急流に飲み込まれてしまうのではないか。そんな不安と焦りがきつと仲間たちを襲つていった。襲われた仲間の数はきっと時間とともに増えている。そうして悩み、悩んだその結論として、大抵は川に飛び込んで、なんとか泳いで、安寧を与えてくれるであろう大石に乗り移ろうとしたのだ。自分はどうと、そんな

泳ぐ力はなかった。身につけるチャンスはなかった。それに、いかんせん怖かった。だから、そんなことはしなかった。そんな自分を客観視できていた。その点、自分は冷静だった。そして何より、自分はこの石の上で満足していたのだ。

就職して五年。彼女からメッセージが届いたのは、ロックバンド、フィロソフイーのライブに参加した日だった。ライブ会場から一、二時間運転して帰宅し、寝支度をした後、ベッドで通知を開くとあまり見慣れないユーザー名から投稿に対しコメントがあつた。

「フィロソフイー、好きなの！ わたしもライブ見に行つた！」

アイコンから投稿を開き、このコメントが×××からのものであることを認識した。

「久しぶり ファン歴6年でやつと行けたんだよね 最高だつた」

すぐに既読がつく。返信が返つてくる。返信を送り返す。

長らく味わつていなかつた熱い感情を覚えた。念願の彼らのライブに行けた夜に、ずっと周りにいなかつた、彼らを愛する同志に出会えたことは昂つっていた高揚感をより一層高めることになった。

結局、この日のやり取りは夜遅くになつても尽きることはなかつた。

日を跨ぎながらチャットで話していく中で、彼女もどうやら地元に残つてゐるらしいことを知つた。あまりいらない地元残り勢。意気投合し、後日、飯に行く約束をした。そういうして二年半、自分たちは今、同棲して二ヶ月になるに至つてゐる。

【やつと暖かくなつてきて、なんだか嬉しいねえ】

日中の暖房を焚かなくても過こせるようになつてきた日曜の昼下がり。マーマレードの塗られたトーストを食べ、にやける彼女はたぶんそんなことを言つた。家中に香る、トースターからの焼けたパンの匂い。互いの手にそれ持つてゐるトースト。表面はきつね色の見た目通り、ほどよくカリッとしている。にもかかわらず、歯応えのある薄い層を噛み切つた先には、パン本来のふわっとした柔らかい食感が、やはりちょうどいいバランスで残つている。もうトースターを買い替えてから、何度か食べているはずなのに、口に入れる、その一口目のたびに意表を突かれる。そんないつでも新鮮な個人的な衝撃は、窓から入る温かい日差しと、多くの言葉が交わされていない、ゆつたりと流れる時間の中に溶け、静かなる感嘆へとその知覚を変えていく。最近買ったこのトースター。自分からすれば少し高級なものだつた。「これじゃないとインテリアに合わない！」と彼女は頑なに譲らず、家電量販店でのしばらくの睨みあいの末、根負けし購入するに至つた。でも今は、この家を包む穏やかな

雰囲気に絆され、なんだかんだいい買い物だつたな、と高かつた値段も許せるような気がしている。

朝からそれとなく点けていたテレビは5分間の天気予報コーナーになり、今日の予想最高気温15℃を伝えている。

「ね？ そう思わない？」

「ん？ あーそうね」

均衡が崩れる。同意を求めてくる彼女に一つ返事を返す。その返ってきた言葉の少なさと言ふことは言いきつた、という自分の態度に一瞬戸惑うような、呆れるような、そんな表情を彼女はしている。でも、天気の話題でそれ以上何を言ふことがあるだろうか。

数秒の静寂。

その間に、天気予報は明日の予報から週間予報に移り変わり、その後には天狗高原に広がるなどらか草原と雄大な風車が映っている。

「ねえねえ、最後に旅行行つたのっていつだつたつけ？」

「んー、いつだつたけね。しばらく行つてないかあ」

生返事で言葉を返す。

「あのさ、ゴールデンウイーク！ どこか行こよお」

「金沢なんてどうかな？ 金沢つて確か、蟹有名だったよね？ なんか美味しい蟹食べた

いなあ」

彼女が続ける話に頭を切り替えようとする。が、感情が追いつかない。こつちはこれから太変なのに、ずいぶんと香氣なもんだと心中で毒づくと同時に、そんな負の感情に結びついて、同棲してから気になるようになった彼女のだらしのなさが思い起される。

「五月だつたら蟹の季節じやないでしょ」

ふと思つた正論が口をついてしまう。すかさず大きく吸つて吐かれる彼女の鼻息が聞こえてくる。その音を聞いて、また返事を誤つてしまつた、と自分を責める。

「ねえ、○○○つてなんでそんな言い方しかできないの？」

いつものパターンだ。詰られる。そう思い、自分はまた物置に逃げ込もうとする。

「え、いや、ちょっと待つてよ！」

珍しく彼女は逃げようとする自分を止めようと、後ろを向いた自分の肩に手をかける。

自分はその手を振り払う。

すかさず物置の戸を閉める。

鍵をかける。

「ねえ…」

ドア越しに彼女の弱い声が聞こえてくる。

いつもと様子が違う。

普段の怒声じやない。

思わず動搖する。

が、どうすればいいのか分からずそのまま部屋に閉じこもる。

黙つて、うずくまる。

少しして、ドアを一発殴る音が聞こえてきた。そして、音沙汰はなくなつた。

無音の、モノで溢れた部屋。

だんだん見慣れてきつた、この光景、この感情。

でも、今日は聞き慣れない彼女の声が聞こえた。

眼前の光景や感情に馴染む前に、ひょっこしたら××との日々は…。

黒いものが頭をよぎる。

崩壊を予期してしまつた。

そんな未来に不快感を覚えた。

そんなことを想像してしまつた自分に不快感を覚えた。

最近頻繁に起つてゐるコミュニケーションの不和はやるせなかつた。  
だが、それ以上に、思い起つてしまつた、現状維持された末に待つ遠くない未来は自分の頭を絞めつけ、耐え難い苦痛を与えた。苦痛はすかさず脳内で渦を巻き、育ち、瞬く間に自分の思慮を埋め尽くした。一人しかいない物置で、自分はただ、嵐が過ぎ去るのを待つように、しばらく思考することを止めざるを得なかつた。

…

彼女の存在が自分で思つたより大きくなつてゐる。この二年半、彼女との時間がいつの間にか、自分から切り離せない「大切」になつてゐた。驚くほど。でも、そんな風に彼女

のことを思つてゐるはずなのに彼女のことは未だによく分からぬ。分かつてゐない。だから、自分は他人事のように彼女に接してゐる節がある。元々、一緒にいて心地よかつたから今も一緒にいるはずなのに。

それは單に地元に残つてゐたという同じ境遇だったからなのか。

共通の趣味があつたからなのか。

二人とも、飯よりパン派だったからなのか。

そうやつて、出会う前から、元から、似ていたといふことだけが理由だったのだろうか。

いや、そうじやない。

そもそも、彼女と自分は全く違う性格だったはずだ。

⋮

高校生の頃。彼女との唯一の接点は、向こう側から一方的に、無差別に流れてくるSNSの投稿だった。連日のバイト終わり、束の間アプリを開くたびに新規投稿欄に彼女のそれがあつた。（このことはフィロソフィーライブの一件があつてアカウントをしつかり認識してからから気づいた。）風仁。彼女の投稿の大部分は、男性アイドルグループ風仁に関する投稿だった。疑いなく国民的アイドルだった彼らを、その頃テレビで見かけない日はなかつた。熱心なファンだった彼女は当時、レギュラー番組を全て欠かさずチェックしていたとう。まあ、熱心な人がいるなあ、とは思つてゐたが、フィロソフィーを好きになつて、自分の好きな芸能人だつたりコンテンツの面白さを人に知らせたくなるような、そんな心理もなんとなく分かるようになつた。

⋮

中学生のとき、家庭が不安定になり、自分は自立を意識するようになつた。勉強は少しできていたから、高校の学費を抑えられるようになると、特待生を目指して内申点を意識するようになつた。それでとりあえず手頃な学級副委員長になつた。その学期の書記は彼女だつた。彼女はとにかくイベントを楽しみにしていて、クラス会議では、いつも誰よりも発言をしていた。たまに提案や説明が空飛になりすぎたときには、「どーどー」とあたかも手綱で馬を

なだめるかのようすに委員長がブレークをかけていた。その姿に、クラスはいつも微笑んでいた。

…

小学生でクラスが同じだったのは確か三、四年生の時だ。彼女は近所に住んでいて、そんな縁で家族ぐるみで一緒に河原へキャンプに行ったことがある。天真爛漫な彼女は清流のその水の冷たさにも驚いてはしゃいでいたが、彼女についてもつと鮮明に、自分の記憶に焼きついているのは、

「サワガニ。」

サワガニを熱心に、一緒に探していた。彼女の弾ける笑顔じやなく、二つちの方が印象深かったのは当時自分が水に苦手意識を持つていたからだろう。河原に着いて、彼女は真っ先に水に入つて、初めのうちは執拗に水に入るよう誘われた。それはとても嫌だった。でも、そんな自分に気づいて、彼女は川での遊び方を教えてくれたように今なら思える。

サワガニ。

彼女と付いて離れて、暗くなるまで探し回つた、

サワガニ。

水は嫌だつたけど、流される心配もなく、それに目的があればなんとか川に近づいて手を突つ込むことができた。

サワガニ。

何匹獲れるか競い合つて、泥まみれになつて、結局お互い4匹ずつしか獲れなかつた、

サワガニ。

途中でハサミに指を挟まれて、見かけ以上の鋭さに涙目になりながら、それでも笑おうとするxxx。そうして指を挟んだ、

サワガニ。

家族のもとに持つて帰つて、下処理をされて、少量の油で揚げられた

食べられた、

サワガニ。

それは自分が初めて食べた「ガニ」だった。あまり覚えてないけど、どちらかといえは美味しかつたと思う。

サワガニを食べているとき、彼女はずつと複雑そうな顔をしていた。でも、なんとなく、そんな彼女を見ていたら、彼女はそれに気づいて、自分の方を数秒見つめて、そして、霧が

晴れたような笑顔を僕に見せた。

「ああ。だから、カニだったのかな。

さつき誘ってくれたのは。

そうなのかもしない。

なら、僕は。

まずは僕自身が喜ぶようにすることがせめてもの向き合い方なんじやないだろうか。彼女の根本がそれなら、僕もそういう風に振る舞つてもいいのかもしない。  
なんとなく、ストンと、整理がついた気がして。僕は物置の鍵を開ける。

「さつきは、その、悪かったと思つ。ぶつきのほうに××の気持ち無視するような言い方して。」

正座で向かい合い、改めて口火を切る。次に何を話すのか、彼女は向うようにじつと自分を見つめる。

「××ついても、自分からすると眩しくて。温かくて。いつも温められていて。それでときどき、ぼーっと温まりすぎて。気づいたら熱いなって思つたりして。なんでそんなに熱いんだよ、って離れくなつて。でも、そうじやなくてさ。なんだか、自分が太陽に温められる地球みたいになつてるけど、別にそうじやなくて。」

たゞたゞしくなつてでも、一つずつ言葉で思いを紡ぐ。とにかくそこに意識を向ける。自分が自分で決めてしまつている性格、他人への干渉制限、「影響の球壁」とでもいうか、オーラというか、そういうものを小さくしないように気を張る。きっと、彼女は聞き入れてくれる。

「きっと、僕の方も、もう少し温かさを持てるはずだつてなんとなく思つて。そういう生き方をこれまでサボつてきてしまつていて。温かさって、たぶん素直に生きることから生まれるのかなつて思つて。自分はずつと、あなたとの差みたいなものに怯えてきたけど、その必要はないのかなつて。自分なんかがつて、線引きしてつもりで、でもそれは傲慢で。正しいと思つたことだけを言うこととか、余計なことを言わないこととか、傷つけないようによることが優しさだとが思つてたけど、そういうわけではきっとないのかなつて思つてさ。だから。無理矢理、気を遣わせてしまつてごめん。これからはさ、お互に、気を遣わないようになんとかややこしい言い方になつてしまつて、思わず口角と目線が上と下に、チグハグに

動いてしまった。喋り方の癖はなかなか抜けないな、と思いながら、彼女の方を見上げてみる。どうやら彼女も自分に釣られたようで、さっきまでの真剣な表情はどこかへ飛んでいつてしまつていた。そんな彼女の笑う顔を見て自分の笑いも込み上げてくる。そんな笑う自分が見て彼女の笑いもささらに増す。どんどんおかしな状況になつていく。笑いが止まらなくなつた。でも、一人ともそれを止めようとは全く思わない。お互いがお互いの思うままに笑い、笑つた…。

爆笑は一段落していき、彼女は目に涙を浮かべながら口を開く。

「なんか最近さ、心を開いてくれてないなつて気になつちやつて。」

彼女も言葉を探す。

「なんか、多分ちよつと焦つちやつた、かな？」

「そうだよね。」

確かに相槌をうつ。その間、彼女の涙の量が徐々に大きくなる。

「追い詰め、で、ごんねえ！」

ついに我慢できなくなり、彼女は咽び、泣く。そんな彼女の背中をさすり、抱きしめ、なだめる。少し、彼女から離れ、近くのティッシュ箱を差し出す。彼女はティッシュに鼻をかむ。涙を拭き取る。拭き取られたティッシュを見て、今日、彼女は一日中家にいたにもかかわらず薄めのメイクをしていたことに気づく。やはり自分が気づけていなかつただけだった。些細なことにも気にかけているつもりになつていただけだつたし、分からないと言いながら、彼女のことを勝手に決めつけていた。自分の中にしばらくあつた感情の不和は自分が勝手に作り出したものだつたのだとその刹那、理解した。

「ごめん、俺も、ほんとに。」

鼻をすりながら、そんな言葉とともに自分の涙も溢れだす。部屋の中に、誰かの涙を止めめる誰かがいなくなる。感情の乱高下。今度は、お互いが一人自身を思つて泣き、泣いた。

…

どれくらい時間が経つただろうか。お互いの情動が鼻をすするのみに収まつてきた。

「あのさ、ゴールデンウイークの話なんだけど、」

彼女は少し疲れた顔をして、こちらに視線を向ける。自分は続ける。

「サワガニを取りに行く、なんてどうかな…？」

彼女は少し考える。

「うーん、疲れるからやだ！」

笑顔を作ろうとしたながら、声のテンションをなんとか上げて満身創痍の彼女はそう言った。素直な返答に、なんだかホッとしてしまい、力が抜け、思わず天井を仰いだ。

その日はその後、今回残念ながら馬の合わなかつたサワガニをきつかけに昔の話をした。（彼女はどうやらサワガニのことはあまり覚えていなかつたらしい。）キャンプに行つた頃、担任だった「大丈夫、大丈夫っ！」が口癖だつた先生のこと。彼女が実家の引っ越しに合わせて、高校受験の志望校を選んだこと。対して自分の方は当時予感した通り、両親が離婚して、その後、母はヒステリックをますます拗らせ、せつかくなつた特待生も維持できなくなつたから高校はバイト漬けだつたこと。彼女が受付の仕事をしている役場に、何度も同じ書類の手続きをしようとするお婆さんがいること。付き合つてすぐにつィロソフィーがドラマの主題歌を担当し始めたけど、その頃からバンドの方向性が変わつてしまい、二人とも興醒めしてしまつたこと。あのときの委員長が有名大学に進学して、カエルの生態を調べてるらしいこと。もう解散してしまつたけど、メンバーは各自活躍している風仁のこと。前にも話したことあるよつた、何も生まれない話を再び、誰も外を出歩かなくなる時間まで続けた。

そして、その夜は数週間ぶりに抱き合つた。

夜はあつという間に明け、朝になる。眠いね、と言いあいながら、二人ともベッドから働きに出る。

時は進んでいく。

川は流れしていく。

「これからも、自分たちが」のまま、ともに暮らしていくのかは分からぬ。

でも、これまで逆らえないと思つていていたあの渾流の流れに、まつたく諦める」ことをしなくてもいいのかかもしれない、と今は思える。自分もこの石から飛び込んでみたい、いつの間にか押さえ込んでいたそんな欲望を持つことを、多くの人が持つ感覚が自分の中にも多少はあることを認めてもいいんじやないかって。

だから、まずは一つ。

澄んだ清流に、足の指先からそつと触れる。

それは、僕が思つより冷たさが鋭く深く刺してきて、だけど、それが僕の輪郭を作り出していくのがなんだか心地よかつた。

作品名 清流

著者 イヅクン  
idknn

発行日 令和7年12月27日 <https://idknn.com>にて公開

本書の無断転載、複製、二次配布を禁じます。

©2025 idknn